# 水 城 跡 I

大野城市文化財調查報告書 一第43集一

1995

大野城市教育委員会

水城跡は長大な土塁が今に残り、『日本書紀』の記述から西暦664年に築造されたことがわかります。大宰府関連の遺構として特別史跡に指定されています。

しかし、水城跡には不明なことが多くあります。前面の濠の問題もその一つです。本市教育委員会では濠の範囲を知るために確認調査等を行ってきました。必ずしも最良の成果は得られておりませんが、問題を解明するためのいくつかの鍵は得られました。今回それらについて報告いたします。ご協力いただいた地権者や地元の皆様に感謝申し上げますとともに、水城解明の一助になれば幸いです。

平成7年3月31日

大野城市教育委員会 教育長 久野英彦

## 例 言

- 1. 本書は国・県の補助を受けて福岡県大野城市教育委員会が実施した特別史跡水城跡確認調査の 概要報告書である。
- 2. 遺物実測は石木秀啓、製図は河鍋洋子が行った。
- 3. 本書の執筆、編集は石木秀啓の協力のもとに舟山良一が担当した。
- 4. 本書に掲載した地形図は、建設省国土地理院発行の5万分1『福岡』・『太宰府』である。
- 5. 大野城市教員委員会の調査体制は以下のとおりである。

教育長 久野英彦 技師 舟山良一 (調香担当) 教育部長 池田嘉門 口 向 直也 社会教育課長 赤星健彦 日 徳本洋一 社会教育課長補佐 中村 茂 石木秀啓 (調査担当) 百 文化担当係長 高橋裕司 嘱託 秀嶋和子 同 主査 吉田 悟

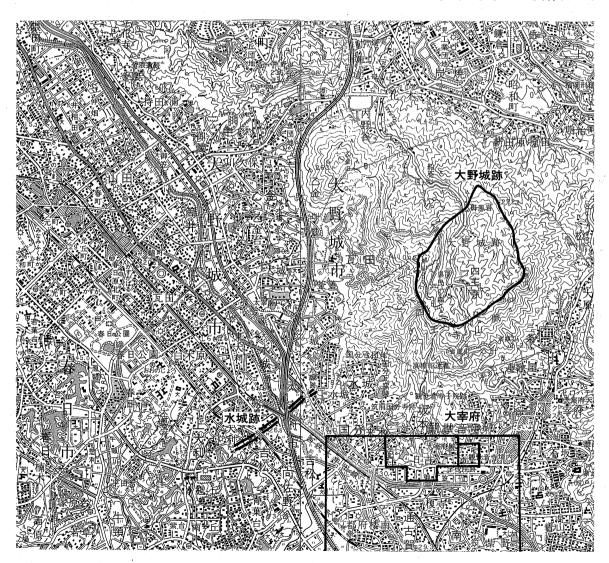
## 本文目次

I	はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	. 1
П	調査の結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	. :
Ш	既往の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	. 7
TV	<b>キ</b> 上め	. (

## Iはじめに

水城跡は『日本書紀』天智天皇三年(西暦664年)是歳条に「筑紫に大堤を築きて水を貯へしむ。名づけて水城と日ふ。」と記されていることから知られる大遺構である。書紀の表現等から、長らく水城はダム的なものであって、御笠川をせき止め、太宰府側に水を溜め、博多湾から攻めいる敵に対して、溜めた水を放流し撃退するための施設と考えられてきた。しかし、関連する小水城を含めての発掘調査によって、土塁の外側(博多側)に濠を掘って貯水し、敵の侵入を防ぐ施設であると考えられるようになった。現在知られている規模は土塁の高さ14m、基底部幅80m、総延長1.2km、濠の幅60m、深さ4mであるが、数値については小異がある。内側から外の濠へ導水する大規模な木樋も確認されている。

さて、外側の濠の規模については、一部で確認されているだけである。濠は現在その痕跡すらも



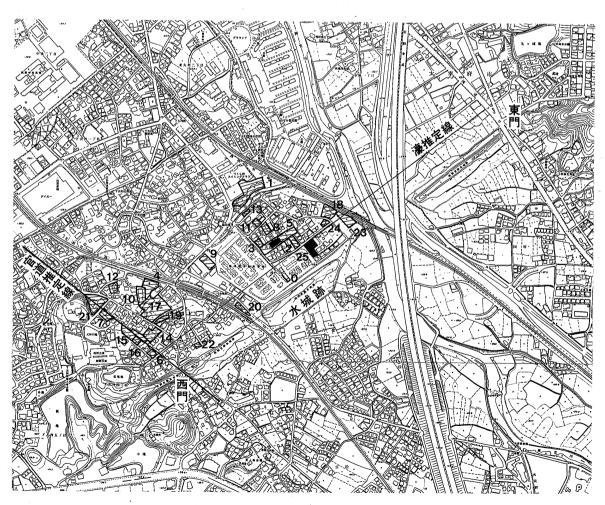
第1図 水城跡関連史跡位置図 (1/50,000)

見い出せず、かつ、水城のほぼ中央付近と両端部では10m前後の高低差がある。即ち西端基底部が最も高く、中央部御笠川付近の基底部が最も低くその差約10m、さらに東端付近がまた高く、その差約7mである。従って、濠を造っても途中何カ所かせき止めない限り水をためられない。

他にも東西2ケ所の門の構造、木樋の数、水の取り入れ先、土塁の上に柵等の施設があったのか、 土塁背面に兵舎等があったのか等々水城の構造についてはまだまだ不明な点が多い。

水城跡は、大野城市と太宰府市にまたがっており、御笠川から西では土塁の頂部を両市の境界が走る。大野城市分は御笠川より西で、かつ土塁の博多側斜面と基底部、そして濠推定部分ということになる。土塁部分のすべてと濠推定部分の一部が国の特別史跡に指定されている。濠の幅が60mと推定されることになった調査は太宰府市域の御笠川の東側で行われたもので、先述したようにすべての地域にわたって同様であったのかはまだ確認されていない。このため、本市においてはどのような状況であったのかを知るために、水城周辺で行われる開発の際には試掘調査・発掘調査を行ってきた。今回報告する調査地も、基底部から約60m以内にあり、濠内と推定される部分であるが、地権者が開発を考えていたため、確認調査を実施して状況を把握しようとしたものである。

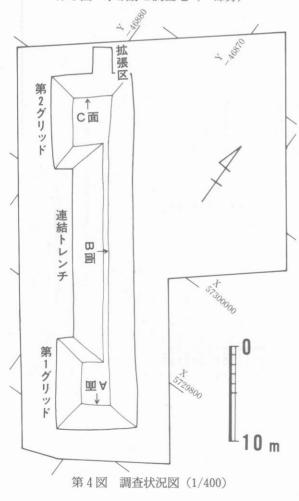
調査は平成6年7月4日から同20日まで、国庫補助事業として大野城市教育委員会が実施した。



第2図 調査区位置図(1/1万)

25:今回調査地

第3図 水城跡と調査地(●部分)



## Ⅱ調査の結果

調査地は土塁基底部から約60m以内にあることから、調査の目的は第1に濠並びに岸部の検出、または岸の近くであることを示す土層堆積の確認、第2に濠内ならば、証明でき得る土層堆積を観察できるか、第3に濠内ならばその深さを知ることができるかに置いた。なお、事前の試掘調査によって、土塁と直交するようなせき的な施設はないことが判明していた。

調査地は砂層が厚く堆積していることが試掘 調査によって判明していたため、壁面が崩壊し ないようにのりをつけて掘削した。土塁に近い 方に第1グリッド、遠い側に第2グリッドを掘 削し、その後両グリッドを結ぶ連結トレンチを 掘削した。さらに第2グリッドの北側に小トレ ンチ(拡張区とする)を掘り、さらに連結トレ ンチ底部分を掘り下げた。掘削はユンボを用 い、壁面を人力で清掃し土層を観察した。グ リッドは約2m掘り下げたが、前述のようにの りをつけて掘削したため、上面で約9m四方、 底面で約5m四方とした(第4図)。

なお、第3の目的である、濠内ならばその深さを知るということについては、グリッド床面にユンボを下ろして掘削を開始したところ、50cmも掘り下げないうちに激しい湧水に会い、壁面が見る間に崩壊し、断念せざるを得なかった。

壁面は第1グリッド南壁をA面、第1・第2 グリッド及び連結トレンチ東壁をB面、第2グ リッド北壁をC面とした。従って、A面とC面 が土塁と平行な面に、B面が直交する面となる。

さて、各面を見比べるとA面とB面南側にだいぶ乱れた層が見られるのに対して、C面とB



第6図 トレンチ壁面 B面(1)

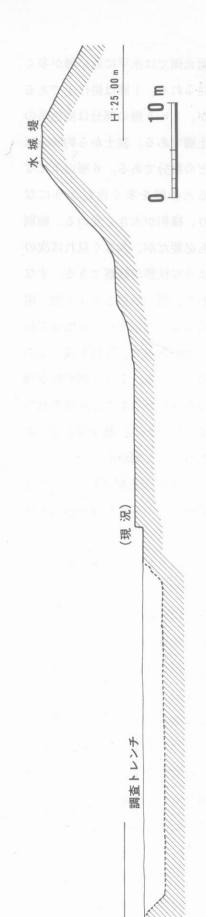


第7図 トレンチ壁面B面(2)



第8図 トレンチ壁面B面(3)

面北側では水平に近い層が多く 見られる。1層は耕作土である が、2~5層の部分は褐色系の 土層である。表土から約50cmほ どの部分である。6層以下にな ると砂層を多く含むようにな り、様相が大きく変わる。細別 も必要だが、大きく見れば次の ような状態が観察できる。すな わち、粗い砂層とシルト層、場 所によってはそれらに加えて粘 土層があって、互層を成してい るのである。シルト層や粘土層 は青味がかるものと黒味をおび るものがある。第5図の薄く網 がかかった層がそれである。た とえばB面北側(第5図)では 35層がシルトまたは細砂層と呼 べるもので、その下の36、20層 が砂層または粗砂層、その下の 37層がシルト層、その下層の22 層が粗砂層、38層が粘土層、39 層が砂層、40層がシルト層、そ の下層が粗砂層となっている。 つまり、シルト層か粘土層の下 は砂層か粗砂層という状態のく り返しである。これは、流れの 比較的活発な時期(粒子が粗く 重いものが堆積する)と停滞し ていた時期(粒子の細かいもの がゆっくり堆積する)が交互に あったものと推測できる。この 部分では3回くり返したと見ら れる。



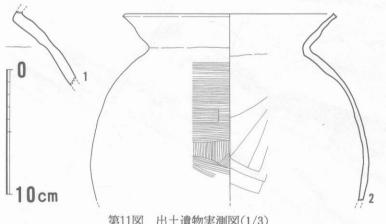
調査トレンチと水城堤 断面概略図(1/400) 第12図



第9図 トレンチ壁面A面



第10図 トレンチ壁面C面



第11図 出土遺物実測図(1/3)

B面南側では南端から13m付近でシルト層が南へ向かって下がり 始め、その一方、南端から7m付近まで北下がりのシルト層がやや 乱れた状態で数条見られる。そして、南端の北6mから13m付近は シルト層が溝の断面を示すかのような堆積を示す。明確な理由はわ からないが、南側から水の力が加わったと観察できる。

全体を通して濠の中と考えてもあやまりではないと思うが、土塁 と反対側の岸を示すような状態は見られなかった。しかし、北端部 から更に北側へ伸ばした拡張区では、壁の崩壊のため簡便な土層図 以外は記録できなかったものの、土層が北上がりになり始める部分 があった。しかし岸の確認はできなかった。

### 出土遺物 (第11図)

全体でも整理箱1箱にも満たない量であったが、須恵器片ごく少 量、石包丁の破片らしき石材、そして土師器が出土した。水城の築 造と関連するようなものはなかった。2は比較的大きめの破片で、形態や調整(外面細かいハケメ、 内面ケズリ)そして器壁のうすさ等から古式土師器に属するものであろう。

## Ⅲ既往の調査

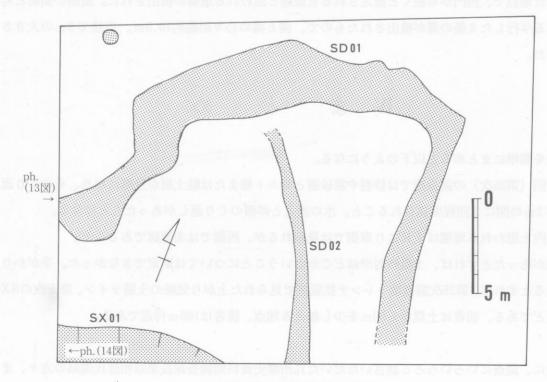
水城跡周辺で行った試掘調査、確認調査は第2図に示すとおりである。0 次調査を1979年(昭和54年)9 月に行った後、7 年間ほど調査はなく、次の1 次調査は1986年(昭和61年)12月に行っている。それからはおよそ8 年間に25ケ所を調査したことになる。このうち、濠推定地と考えられる部分の

第13図 第5次調査地全景(南西から)



調査は東から23次、25次、0次、20

第14図 第5次調査地SX01西壁



第15図 第5次調査状況図(1/200)

次、22次調査である。25次(今回)は前章で述べたとおりで濠内と考えても無理はないと思われる。0次、20次調査も砂とシルト又は粘土層の互層状態が見られた。23次は地表下 2mぐらいまでは粗い砂層が多かった。御笠川のすぐ西にあるという事情かと考えられる。これらに対し22次調査分についてはやや異なった様相を呈していた。すなわち、10cmの厚さの表土の下は灰色砂層が40cmほどあり、以下2.9mの深さまで青灰色粘土、黒色粘土、青灰色粘土、黄色粘土と続く。湧水のためそれ以上の掘削は不可能であった。ほとんどが粘土で濠内と言うより、いわゆる地山と考えた方が良さそうな土質であった。 %「0次」は整理の混乱のため便宜的に付けたものである。

濠推定地以外ではJR鹿児島本線以東部分は固くしまったシルト層や粗い砂礫層が「地山」となる傾向にある。土塁から約100m北の地点に当たる5次調査地点は部分的ではあるが(約450㎡)、表土をはいで確認調査を行った(第13~15図)。そこでは溝2条、ピット1、不明落ち込み1が検出された。溝SD01は最大幅3.5m、最小幅1m、深さ0.4~0.6mの規模で孤状にめぐる。SD02は南北方向に比較的直線的に走る溝で、深さは約10cm、北端部は自然に高くなって終わる。両者とも人工の溝かは疑問がある。不明の落ち込みSX01は調査区の南西隅で検出されたもので、急角度で南側(土塁側)へ下がる。1.5mまで掘り下げたが、底には至らなかった。色の違う砂層が堆積していて(第14図)、かなり大規模な溝状の埋土を思わせる。濠の岸部の可能性もあると考えたが、隣接地の関係でそれ以上掘ることができなかった。なお、SX01の上端部は土塁と平行とは言えない。

その他ではJR鹿児島線以西では、第4、6、15、16、21次で遺構が検出されている。第4次では 奈良時代、6、15、16次では平安時代と思われる土師器小片が少量出土している。21次は谷川遺跡と 名づけた地点で、西門から続くと推定される官道跡と思われる遺構が検出された。道路の側溝と考えられる平行した 2条の溝が検出されたもので、溝と溝の心々距離約10.5m、内法で9mの大きさであった。

## Ⅳ ま と め

以上を簡単にまとめると以下のようになる。

- 1. 今回(第25次)の調査地では砂層や粗砂層とシルト層または粘土層が互層になり、そのくり返しが 2mの間に 3 回程度見られること。水の流入と停滞のくり返しがあったことになる。
- 2. 濠内と思われる堆積はJRより東側では見られるが、西側では未確認であること。
- 3. 濠があったとすれば、土塁の対岸はどこかということについては断定できなかった。手がかりがあるとすれば、第25次調査地トレンチ拡張区で見られた上がり気味の土層ライン、第5次のSX 01などである。前者は土塁から60mを少し越える地点、後者は100m付近である。

最後に、調査にいろいろとご助言いただいた九州歴史資料館調査課長栗原和彦氏他県の方々、また、第3図の写真を提供していただいた太宰府市教育委員会に厚く感謝の意を表したいと思います。

#### 報告書抄録

\$	'n	がな	みずきあと									
書		名	水城跡 I		-							
副	書	名		•								
巻		次										
シ	y –	ズ名	大野城市文化	大野城市文化財調査報告書								
シ	リーフ	《番号	第43集				-					
編	著	者名	舟山良一									
編	集	機関	大野城市教育	大野城市教育委員会								
所	在	地	〒816 福岡	〒816 福岡県大野城市曙町 2-2-1 TEL 092-501-2211								
発	発 行 年 月 日 西暦 1995年 3月 31日											
	のがな は遺跡名	ふりがた 所 在 均	,	ド遺跡番号	北 緯。/ "	東 経。,,,,,	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因			
水	城跡	ない。 ないは、 ないで	it it		33° 30′ 36″	130° 29′ 21″	1994 07 04 \$ 1994 07 20	300 m²	重要遺跡確認調査			
所収遺跡名 種名		種名	主な時代	主な時代 主な遺構 主		主な	: 遺 物	特記事項				
水	城 跡	土塁	飛鳥•奈良	濠		土師器		664年に築	造			
		漫										
	-											

## 大野城市文化財調査報告書

第 43 集

平成7年3月31日

発 行 大野城市教育委員会

福岡県大野城市曙町2丁目2-1

印 刷 株式会社 川島弘文社

福岡県東区箱崎ふ頭6丁目6番41号